能と近代文学

増田正造

平凡社

能と近代文学

増田正造

平凡社

講座 古代学 ©1975
昭和50年1月15日印刷　昭和50年1月25日発行　検印廃止
編者 池田彌三郎　発行者 高梨 茂　印刷所 三陽社

発行所 中央公論社　東京都中央区京橋2-1　振替東京34番

能と近代文学

目次

まえがき 8

第1章 泉鏡花の世界 13

「歌行燈」 14
「白金之絵図」 25
「木の子説法」 30
「くさびら」と「青鷺」 34
「五大力」「朝湯」「卵塔場の天女」 37
付・有島生馬「嘘の果て」 52
杉本苑子「珠の段」 19　関良一「近代文学と謡曲」 35　里見弴「蛇咬毒」 53

第2章 能が生んだ二人の作家 59

松本たかしと夢野久作

松本たかし　俳句と俳諧詩 60
松本たかし「初神鳴」と映画「獅子の座」 73
松本たかし「殺生石」から「一番能」へ 81
夢野久作　喜多流と「梅津只円翁伝」 85
夢野久作「あやかしの鼓」 95
鶴見俊輔「夢野久作 迷宮の住人」 94

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第3章　絢爛たる作家群　101

立原正秋・赤江瀑・秦恒平の距離

立原正秋における能の認識の問題　102
立原正秋における能面と能　116
赤江瀑「阿修羅花伝」　127
赤江瀑「禽獣の門」　137
赤江瀑「遠臣たちの翼」　144
秦恒平　世阿弥の『井筒』と「孫次郎」　150
秦恒平「清経入水」　155
杉山通敬「ゴルフ花伝書」　104
小川国夫「天の花　淵の声　能界遊歩」　106
立原正秋の書簡　114
立原正秋「鎌倉薪能におもう」　115
立原正秋能楽語録①　119　②　120　③　121　④　123　⑤　125
立原正秋描く能面「その年の冬」　131
司馬遼太郎「坂の上の雲」　146

第4章　能に親しい人びと　157

滝井孝作・網野菊・丸岡明

滝井孝作「無限抱擁」と能の周辺　158
滝井孝作『求塚』と漱石の『心』「『狂言記』礼讃」　167
網野菊「定家」　173
網野菊「烏頭」「動物抄」「芦刈」「三番叟」　179
丸岡明「石の叫」「靴音」　184
丸岡明「月見座頭」と狂言『月見座頭』　196
河東碧梧桐「碧梧桐千句」　159
高浜虚子「杏の落ちる音」　160
志賀直哉「馬と木賊」　165
谷崎潤一郎「芦刈」　178
阪本若葉子「釣狐」　180
堀辰雄と能　190
谷崎潤一郎「月と狂言師」　196

第5章　土岐善麿と馬場あき子　199

土岐善麿の短歌と新作能　200
土岐善麿　その能の実践とその歌　210
馬場あき子　女人の見る能の冥さ　218

第6章　夏目漱石の謡と作品　229

漱石における謡と師と　230
夏目漱石　「草枕」――婆か爺か　236
夏目漱石　「行人」の中の『景清』　240
ふたつの新作能『実朝』　204　中勘助「鶴の話」ほか　206　真壁仁「神聖舞台」　221
宝生新「夏目漱石」　231　「吾輩は猫である」より　238　漱石の謡曲観　240

第7章　世阿弥をめぐって　245

山崎正和・北条秀司・杉本苑子・吉川英治
滝川駿・田岡典夫・森本房子・松本清張

山崎正和　「世阿弥」　246
北条秀司　「花のゆくえ・世阿弥」　254
杉本苑子　「華の碑文――世阿弥元清」　266
吉川英治　「私本太平記」　271
再び「華の碑文――世阿弥元清」　274
史実と小説の間　滝川駿・杉本苑子・田岡典夫　279
山崎正和「世阿弥と現代文化」　247　菊池寛「小野小町」　256　山田風太郎「婆沙羅」　264
大河内俊輝「撩乱の花」　292　柳沢新治「能楽秘話・喜多七太夫夏の陣」　293　長尾宇迦「善知鳥の鼓」　294　堂本正樹「夢の跡訪う」　294

森本房子「幽鬼の舞」290
松本清張「小説日本芸譚」の「世阿弥」298
付・松本清張「足袋」「山師」304

第8章 三人の『砧』311

遠藤周作・赤江瀑・山崎正和の場合

遠藤周作「わが恋う人は」312
赤江瀑「元清五衰」の『砧』320
山崎正和「世阿弥」における『砧』322
立原正秋「きぬた」313
秦恒平の描く『砧』318
円地文子「砧」316

第9章 郡虎彦から三島由紀夫へ325

郡虎彦「清姫」「道成寺」「鉄輪」326
三島由紀夫 その能とのかかわり337
三島由紀夫「近代能楽集」における舞台の実際348
三島由紀夫における狂言359
三島由紀夫 再び「近代能楽集」367
三島由紀夫「中世」「金閣寺」「英霊の声」378
『道成寺』の系譜331
太田省吾「小町風伝」347
三島由紀夫「天人五衰」350
高村光太郎『智恵子抄』378
三島由紀夫「『智恵子抄』に期待する」より381

第10章　円地文子と能　385

「あの家」386　「仮面世界」389　「菊慈童」392　円地文子と『道成寺』388　「菊慈童」修正392

第11章　女流作家の描く能　397

皆川博子・倉橋由美子・山本昌代
三枝和子・中里恒子・大原富枝

皆川博子「変相能楽集」398　倉橋由美子「白い髪の童女」401　倉橋由美子「怪奇掌篇」406　山本昌代「善知鳥」「葛城」「逆髪」409　抜粋・三枝和子における能416　中里恒子「綾の鼓いすばにやの土」「百万」429　大原富枝「鬼女誕生」435　『黒塚』のひろがり402　緒方ゆき「霊の女」405　緒方ゆき「鐘供養―乱拍子」407　杉本苑子「逆髪」408　富岡多恵子「逆髪」412

■能の推理事件小説八篇――坂口安吾「能面の秘密」419　高木彬光「能面殺人事件」420　斎藤栄「鎌倉薪能殺人事件」421　斎藤澪「卒都婆小町殺人事件」423　皆川博子「世阿弥殺人事件」424　紀和鏡「薪能殺人舞台」425　曽野綾子「能面の家」426　内田康夫「天河伝説殺人事件」427――『綾鼓』の系譜430

第12章　野上弥生子の足跡　443

豊一郎・弥生子・新・弓川444　子方なしの『隅田川』芥川竜之介「金春会の隅田川」455　能の主題を詠む馬場あき子446　芥川竜之介「相聞」456　星新一「羽衣」462　有吉佐和子「綾の鼓」468　悦田喜和雄「綾の鼓」469　小林秀雄「無常という事」481

「京之助の居睡」 458
「藤戸」「邯鄲」 462
「綾の鼓」 467
「迷路」 471
「迷路」における江島宗通の虚像と実像 478
「秀吉と利休」 489

あとがき 501

主要作品名・能楽曲名索引 I　主要人名索引 VII

凡例

一　引用文の仮名遣いは現代仮名遣いに、漢字・人名はすべて新字体に改めた。ただし、古典と詩歌については、出典の表記にしたがった。

一　引用文中の難解な漢字には、ルビを付した。

一　引用した作品の底本は、とくに初出本には拠っていない。

一　能および狂言の演目は『』、その他の作品名は「」とした。

まえがき

世阿弥は本説（ほんせつ）ということをとくに重要視した。正しい典拠にのっとった作品ということである。これは和歌における本歌取りの技法に似て、舞台の演技と、観客の知識との連鎖的なイメージのひろがりを意図したものであろう。

能を本説とし本歌とする、芸能、文学の展開も、見事な裾野を見せている。私はここでその全容の中から、近代文学という一角を切り取る試みをした。

しかし、この小論における基本的な問題として、近代文学の範囲をどうとるのか。近代文学と現代文学とに分ける考えかたもある。その境目を、プロレタリア文学の勃興を重視して、芥川竜之介前後とする人もあり、第二次大戦を区切りとする立場もある。ここでは漠然と、明治以降という視野で、作品を取り上げることとしたい。

近代文学の中で能がどう描かれたか。

近代文学者と能がどうかかわったか。

近代文学に能がどう影響を与え、どう展開したか。

能舞台において、近代文学がどう生かされつつあるか。

これらを、あくまでも能という細い管から眺めるのであって、その文学作品としての評価を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

云々しようという意図ではまったくない。

能をただ文学の素材として扱った作家ばかりではない。

能役者であり作家でもあったという、松本たかし、夢野久作の例は、二つの立場が重なり合っている。

泉鏡花は、能の名家と深い縁で結ばれた作家である。

世阿弥から出発したとみずから言うのが、立原正秋であり、杉本苑子の場合である。

三島由紀夫は、その文学が能の本質と深く交錯する希有の例であり、能のテーマを現代に生かしつつ、能楽と正面きって銘打ったのは、その「近代能楽集」を嚆矢とする。

能と深くかかわりをもった作者も多い。英文学者の野上豊一郎は、能に新しい光を当てた人だが、夫人の野上弥生子もまた、能の世界と親交があった。

夏目漱石は、謡の稽古に耽溺に近い傾斜を見せた。それを導く高浜虚子や、河東碧梧桐は、能のワキを勤めたりしている。下懸り宝生流を学んだ人たちである。

そして喜多流をめぐる人びと。夢野久作、滝井孝作、網野菊、土岐善麿、馬場あき子。

喜多流がこうした人びとの核となったのは、そのいさぎよい武士道的姿勢と、総帥喜多六平太（先代）の至芸、そして後継者としての喜多実の進歩性にあった。観世流の名門、観世栄夫が喜多流に走ったのも、そういう魅力によってであり、第二次大戦後から現在に至る、もっとも話題を提供する人物となった。

近代文学に登場する人物を能役者の側からみると、高浜虚子や、夏目漱石一門と関係ある、不世出のワキ方の名人宝生新がある。桜間弓川がまた多く描かれているのは、円地文子にみる

ように、その舞台への感動もあるが、高浜虚子、野上豊一郎夫妻との親交、その芸の古雅と近代性との融合、謙譲な人柄によるものである。能楽界の巨匠先代梅若万三郎の風貌は、野上弥生子の筆によって十二分に描かれ、幽玄美の最高峰を極めた野口兼資については、三島由紀夫が活写している。

多くの謎に包まれた世阿弥の生涯と、非運に没した長男観世元雅が、恰好な題材であることは、また言うまでもなく、杉本苑子、山崎正和ほか多くの作家の挑戦がある。

泉鏡花、有島生馬、円地文子、赤江瀑、秦恒平らの描く能役者群。松本清張は世阿弥にとどまらず、現代の女流能楽師を不倫の題材に扱って成功している。

能面のテーマもあり、鼓師や能装束師の怨念の素材もある。

能の序破急の構成様式を、そのまま作品に応用したのは、三島由紀夫と三枝和子である。

狂言については、谷崎潤一郎の茂山千五郎家との交流も美しく、滝井孝作や三島由紀夫も興味をもった。『釣狐』が泉鏡花から三島由紀夫、網野菊と扱われ、『月見座頭』の世界は、丸岡明が書いている。丸岡明は、能楽の専門書肆社長でもあった作家である。

中勘助の「鶴の話」は、土岐善麿の新作能『鶴』となり、木下順二の「彦市ばなし」は、狂言の演技によって最大の成果を収めた。深沢七郎の「楢山節考」は、狂言能とでも言うべき、回想形式の新しい切り口で上演され、高村光太郎の「智恵子抄」は、現代語のまま現代の能となった。ともかくシェークスピアの「ハムレット」が英語のままアレンジされて、能となる時代である。能にヒントを得たイエーツの「鷹の井戸」が、能に逆輸入されて新作能『鷹の泉』『鷹姫』となり、また英語の原作がそのまま能としても上演されている。

こうした新しい動きも、また「世阿弥殺人事件」も登場する時代の流れを視野の一方に置きつつ、近代文芸と能とのかかわりを眺めた。

この著の範囲ではないが、フレデリック・フォーサイス描くＫＧＢ工作員は、「能面のような表情で、デモ隊がゆっくりと進んでいくのを」見守っている。クライブ・カッスラーのダーク・ピット少佐シリーズのアメリカの潜水艦少尉は「能面のように無表情」であり、世界のベストセラー作家ロバート・ラドラムの秘密のアジトの女性工作員が、寄る年波と厚化粧で「能面のような顔をしている」。こうした描写が目立ち始める時代となった。原文に「Noh-mask」とあるわけではないのに、それぞれ異なる翻訳者が、あたかも申し合わせたかのように「能面」と訳しているのは、外国のハードボイルドにまで、能の潜在意識が影響している例証であろう。

本著「能と近代文学」では、泉鏡花に始まる能の世界とかかわりのある作家たちを前シテに置き、アイ狂言の位置に、世阿弥と、その名作『砧』をめぐる戯曲・小説を挙げ、後段には、三島由紀夫とその先駆者たる郡虎彦、そして野上弥生子、円地文子の作品を柱に、多彩な女流文学陣の描く能を取り上げた。

下段には注釈的なものと同時に、なるべく広範囲に能と文学の展開を紹介した。

現代という時代は、文学者に限らず文化人たちの能への関心が薄れていることも事実だが、逆にそれこそ史上空前の多くの人びとが、国の内外を問わず能を楽しんでいるのも実情である。

能や狂言が、よりふさわしい、また斬新な発想で、新しい文学に寄与することを願う。

装幀　平野甲賀

第1章　泉鏡花の世界

付・有島生馬「嘘の果て」

「歌行燈」

泉鏡花の代表作「歌行燈（うたあんどん）」を、能楽的と評したのは国文学者・吉田精一である。

その進行法は、能楽の構成原理である序破急五段の強調漸層法にのっとっている。悠揚たる出だしで、徐々に雰囲気を構成し、ゆるやかな展開から、次第に終わりに近付くにつれて場面の転換も小きざみに、速やかに最後の急の段ともなれば、にわかに急迫の調を帯びる。――かなたにお三重が颯と燃ゆる調べの緒によろよろと立てば、こなたに喜多八が、鼓の音につっ立ち上がる。源三郎の謡とお三重の舞と喜多八の謡と入り乱れて、しめつ、緩めつ畳み上がって来た感動の最高調の渦の中に、舞いつづけ、謡いつづける最終の場面は、乱拍子うって急激に舞い収める能楽の終局と変わるところがない。

また「膝栗毛」よろしく旅をする二人の老人――能のシテ方と小鼓方の名人がワキの役であり、シテは勘当された天才肌の能役者恩地喜多八、ツレは薄幸の美女お三重、アイ狂言がうどん屋の亭主とし、喜多八の芸に憤死した按摩宗山を喜多八の語りで表現したのは、能の『忠度（ただのり）』のシテの平忠度の亡霊がそのまま、自分を討った六弥太となって演ずるやりかたと同じと指摘している。

言うまでもなく、泉鏡花は能の家と深い関わりをもって生まれた。父は彫金師・清次だが、

泉鏡花（一八七三～一九三九）小説家、金沢生。尾崎紅葉に師事。第一期「夜行巡査」「外科室」、第二期の「照葉狂言」、第三期の「婦系図」「白鷺」「日本橋」「歌行燈」など、艶麗な虚構の美で一世を風靡した。「天守物語」は、観世寿夫・野村万之丞らの冥の会で上演され、観世銕之丞（当時・静夫）が主演した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com